

人の社会的役割性

極めて平凡でおとなしい学生たちが、例えアルバイト仕事であっても、囚人役と看守役に分かれたら、互いに非人間的な状態になったり、行動を起こしたりした理由について、いろいろな論議が行われました。

一つの答えは、世間には、囚人とはこのような役割性を持った人間だ、看守は囚人を監視する仕事だから、当然このような役割性のある人だと、世間がつくりあげた囚人像、看守像に学生たちが無意識に演じたという考え方です。また、この実験は有名大学の教授たちによって行われ、後世に残るかもしれない権威ある実験だと、参加した学生たちが教授たちの期待に合わせようとした。それ故に、個々の学生のパーソナリティから引き起こされたのではないという説です。

これに対して、監獄という過酷な実験から人格的な変容が起こったという考え方もあります。世界の多数の監獄で、実験が引き起こしたような人格否定が行なわれているという報告はない。監獄がすべて同一の残酷性を持っているのではなくて、囚人役や看守役が、生まれながらに持っている性格や、後天的に身につけた気質がそれぞれの監獄実験に反映されている故に、実験で起こったことは彼らが元々心の奥に閉まっておいたものだという説です。

いろいろな学説が飛び交いましたが、結論的には、例えば、看守役が囚人を罵倒し人格を破壊するようなことをする背景は、看守のパーソナリティ（人格、人柄、気質、育ち）ではなくて、看守という役職は国家の制度に守られていることを学生たちは知っています。故に、囚人には何をなすべきか、暴れる囚人には罵倒し痛めつけることが正しいのだという意識、特に権力を行使できる立場のある者は、制度的(国家的)に認められたものであればあるほど、より一層その役割性を実現させようとする心理が働くようです。

また、反対に国家の制度に保障された強い権力の元では、囚人役の反発心は消え、無気力になり、強い権力に依存症とするという説です。

親と子どもの関係にも同じ心理が働き、当然、力の弱い子どもを相手にする職業—保育者や教師もこのような心理を駆使しているのです。

(終)